

男は 痛い

!

國友万裕

第4回

フライ・ダディ・フライ

1. 上裸で散歩

8月のある朝。僕は鴨川沿いにある30過ぎの男性と上半身裸で散歩していた。

「楽しいなあ。こうやって男同士で裸になると、男同士って感じするものね」

「女にはできないことですものね」

と話しながら、1時間くらい半裸のまま、2人で歩いた。朝の鴨川沿いの空気を素肌を感じるのとはとても気持ちがいい。通りすがりの人も何人かはいた。一人だと、女性から見られるのはちょっと気になったかもしれない。いくら川べりとはいえ、裸になるのはちょっと恥ずかしい。しかし、2人だと、まったく恥ずかしさを感じない。むしろ、男の友情をたっぷり感じて、この時間がずっと続いてくれればいいなあ、鴨川の流れを見ながら感じたりもした。

彼と僕は、「お互いの乳首を見せ合う仲」だ（笑）。「乳首」なんて卑猥に感じる人もいるかもしれないけど、日ごろ、大学生と接していると、今の男子大学生は、頻りに乳首という言葉を使っていることに気づく。しかも、女性の乳首ではなく、男の乳首だ。僕は専門学校でも教えているのだが、専門学校は大学に比べると先生と学生の距離が近いせいもあって、服の上からではあるが、もろ僕の乳首に触ってくる男子学生がいる。「先生、こんな着ているのに乳首出ていますよ」と僕の乳首を指で弾いてきた男子もいたし、「先生、乳首、すけてますよ。セクハラですよ」とギョッと乳首を摘ままれたこともあった。

昔は男の乳首なんて、大した意味はもたなかったのだろうけど、今は、ダウンタウンや

からお笑い芸人がネタに使うせいか、一つの記号のようになってしまっている。女は乳首があるから胸を隠す、しかし、男は乳首があるのに胸を隠さない……これはジェンダー的に考えても面白い事実なのである。男の子が、男の乳首の存在を意識する。なんとなく男の子が女っぽくなってきたみたいで、僕みたいな男には結構嬉しい。

1時間あまり、たっぷり乳首を出して歩いた後、「最後に鴨川ファイトクラブをしましょうか」と彼が言い出した。『ファイトクラブ』はブラッド・ピットとエドワード・ノートンが主演の映画で、男たちが上半身裸で殴りあうクラブの話だ。「殴りあうんじゃなくて、国友さんが俺を殴ってくださいよ。俺は逃げるから。ちょっとでも俺の身体に触れたら、国友さんの勝ちですよ」と彼は言った。で、それから5分ほど、逃げる彼を、僕が拳を掲げて追いかけて、走り回った。もちろん、身体の動きの迅速な彼に俺の拳があたるわけがない。散々振り回されて、息はぜいぜい。「結構、頑張りましたね(笑)」と彼は言ってくれた。

たっぷり男の喜びを満喫した時間だった。

2. 救世主が現れた!

この6月頃、FACEBOOKで毎日のようにぼやいていた。「腰が痛い!!!」。。。。
整骨院には通っていたのだが、異常に痛いので病院にも行った。ついには、仕事を休んで、ちょっと遠いところにある整体院にまで足を延ばしてみた。しかし、痛みはおさまらない。僕は元々、猫背で、それを治そうと意識していたため、そり気味の姿勢になってしまった。腰に激痛が走るようになったのは、それが一

つの原因だったようだ。

そんなある日。FACEBOOKにメッセージが届いた。友達登録をしている男性からのメッセージだ。「僕は今、出張マッサージをやっているんです。よかったですら治療させてくれませんか。最初はお試しだから、料金は要りません。代わりに飯をおごってください」という内容のものだった。

彼は以前、僕の通っているスポーツクラブでインストラクターをやっていた人だ。偶然彼のFACEBOOKを見つけて、僕のほうが友達リクエストを送り、承認してもらった。といっても、彼と再び会うことはないだろうと思っていた。彼は3年ほど前にスポーツクラブをやめて、それ以来、会う術もなかったし、何よりも、彼と僕の関係は、顔見知りという程度で友達というほど深いものではなかったからである。

彼が僕の部屋に初めてやってきたのは、6月の半ばのことだったと思う。1時間たっぷりマッサージをしてもらった。予想以上に気持ちよかった。相性もいい。僕は、ちょっとしたマッサージ通で、さまざまところでマッサージを受けてきたが、マッサージは上手い下手もさることながら、相性の問題がある。生理的にいやな人に触られるのは気分が悪い。あれこれ世間話をしながら身体を押してもらうわけだから、性格的な相性もある。彼は、どの角度から見ても最高に相性がよかったし、これはしばらくやらしてもらおうかと思った。

その後、2人でイタリアン・レストランに行き、飯を食いながらあれこれ話した。てっきり僕は、彼は3年前までスポーツクラブの正社員だったのだと思っていた。ところが、彼曰く「一番正社員らしいバイトだったんです」。

考えてみれば、彼はあの当時、20代後半。バイトの子は、大抵は大学生だから、年が他のバイトの連中よりも上だった分、正社員ぽかったのだろう。彼は、脱ぐとヘラクレスだが、性格はやさしいタイプ。怖い奴が苦手な僕は、優しいタイプの男の人としか友達になれない。彼の裸を始めてプールで見た時、驚いたものだ。顔はかわいいのに、身体は鍛えに鍛え抜かれている。プールサイドで体操をしている彼に思わず近づいて、「いい身体なってますねー」と言ってしまったのを覚えている。

彼が担当していたクラスで印象に残っているのは、水中ウォーク。上半身裸のままプールサイドにたって、指導してくれた。他の指導員の人は、上裸にはならないのだが、彼は「筋肉の動きを見てほしかったんです」と言っていた。お客さんは、おばさんがほとんどなので、汚い男の先生だったら、「シャツの一枚くらいつけてくれ」とクレームがついていたところだろう。筋肉隆々の男の裸は、女性に威圧感を与えるし、間近に見て気持ちのいいものではないらしい。しかし、彼は顔がかわいいし、物腰がソフトなので、なんとなく身体とアンバランスで、魅力的だった。清潔感があった。

しかし、その後、いつの間にか彼はいなくなっていた。僕の通っているスポーツクラブは、正社員の人でも他の店舗に転勤したり、退職したりで、しょっちゅう移動があるし、バイトの子は、いつの間にか辞めていたりするのだ。なんとなく、寂しかった。

男同士でも、どうしても友達になりたいと思うタイプの人と、握手するのも嫌だと感じる人がいるものだが、僕にとって彼は間違いなく前者だった。しかし、彼と友達になれる

わけがない。ただのインストラクターとお客さんの間柄だし、じっくり話す機会もない。どっちみち、友達になれるはずもなかったのだ。

その彼から突然の連絡。運命的なものを感じた。ひょっとすると、この人は俺の救世主なのかも知れない。

3 . やはり、救世主！！

果たして、その通りだった。

それから何度か続けてきてもらったのだが、友情はトントン拍子に進んでいった。2度目の時は、「まず、部屋の掃除をしましょうか」と本と書類で埃だらけの僕の部屋を箒ではいてくれ、それから、いらぬものは手際よくどんどん捨ててくれた。若さの自信なのか、人の部屋に来て、これだけ自分の判断で捨てていいのかと思うくらいだったが、彼の捨てる技術は大変なもので、僕の部屋は、みるみる綺麗になっていった。

さらに「ベッドのシーツを洗濯して、コインランドリーで乾かして、気持ちのいい状態で、マッサージしましょう」と、洗濯が終わった後、2人で近所のコインランドリーに行った。僕はコインランドリーなんて行ったこともなかったのだが、2人であれこれ話をしていると、乾燥するくらいの時間はすぐに過ぎる。彼はマッサージというだけでなく、ボディ・メンテナンスをやりたんだと言っていて、そのためには環境も大事だと考えているみたいだった。

さらに、3度目の時だったと思う。今度は彼のほうから「僕の部屋の掃除ができたので、今日は僕の部屋でやりましょう」と連絡がき

た。彼が車で迎えに来てくれて、行ってみると2ルームの小さなマンションだが、こぎれいに片付いている。彼は、マッサージのバイトをしばらくしていたことはあるみたいだが、個人で始めたのは最近みたいで、「まだ今のところ、自分と相性のいい人や僕を可愛がってくれる人にだけやっているんです」と言っていた。

彼と僕の友情は加速度的に進んでいった。その後、2人で、船岡山に登り、写真を撮り、それから船岡温泉に入りに行った。船岡温泉は有名な銭湯で、スーパー銭湯ほど大きくはないけども、町の銭湯の割には大きくて京都らしい風情がある。すっかり気にいってしまった。鏡の前で、彼と並んで、お互いの裸を見比べた。「やっぱり、お腹が全然、違っているよね。俺は、胸より腹のほうが大きいもんなあ(笑)」と僕は言った。2人で、話をしながら、サウナに入り、水風呂に入り、露天に入り、電気風呂に入り、たっぴりと男同士の裸の付き合いを堪能した。その後、彼の部屋でマッサージを受けたのだが、マッサージの終わりがけに、「カレーをつくったんですけど、食べていきます？」と飯まで出してくれた。サラダもつけてくれて、味も上手い。

7月になると、僕は急に引越しが決まったため、荷造りやらなんやらで忙しかったのだが、彼が何度もプライベートで手伝いに来てくれて、大助かりだった。今、思えば、無茶な引越しの計画だった。一番、暑い時期だし、僕の仕事も一番忙しい時期だった。疲れもたまっていた。彼がいなかったら、引っ越しは終わっていなかっただろう。本当に神様がくれたプレゼントのような人だ。

そして、鴨川の上裸散歩。たったの2か月

の付き合いで、彼は僕の人生になくってはならない人になってしまったのだった。

4. 『フライ、ダディ、フライ』

彼と俺は、まるで『フライ、ダディ、フライ』(2005)のような関係だなあと思った。これは娘を傷つけられたおっさん(堤真一)と彼を鍛えなおして対決させようとする高校生グループのスンシン(岡田准一)の奇妙な友情を描く映画だ。

年の差からしてそっくりだった。僕は堤真一とほぼ同い年だし、彼は岡田准一とほぼ同い年。16歳違いだ。服装も、彼は、夏場は大抵タンクトップ姿で、映画の岡田准一そのものだ。映画ではスンシンがおっさんにあれこれ身体を鍛える手助けをしていくのだが、この主人公のおっさん、堤真一が演じているから、それほどカッコ悪くは見えないが、原作ではもっと無様なおじさんと描かれているらしい。まさしく僕と似たタイプだ(笑)。

映画では、このおっさんが、スンシンと出会ったことで変化していく様子が描かれるのだが、僕も彼と出会った後、どんどん変わっていった。

引越しが終わった後、「前のところのままだったら、国友さん、10年ぐらい寿命が短くなっていたはずですよ(笑)」と彼は言った。そう言われてみれば、そうだなあ。俺は、掃除が嫌いだし、引っ越すとなるとお金がかかるので、同じ賃貸のマンションに18年以上も暮らしていた。こういう賃貸のマンションだと、皆、2,3年で気前よくでていくのだが、お金かかるのによくやるなあと思っていた。しかし、実際やってみると、引っ越しはお金に代

わるものを与えてくれる。新しいマンションに移って、気分はさわやかになったし、18年もたまったほこりからおさらばする生活は何ともいいものだ。

また彼の影響で、ダイエットも本格的に始めた。食事は間食にヨーグルトを食べることにした。まともに食べるのは一日に一食だけにとどめ、後はヨーグルトと軽いものですませる。この甲斐あって85キロくらいあった体重が、今は78キロだ。

それから運動。彼が僕に教えてくれたことは、スンシンのおっさんへの台詞に似ている。スンシンは、おっさんに「まずは基礎づくりだ。おっさんの頭の中には余計なものがこびりついている。それをそぎ落とすんだ。要は走ればいいんだよ」という。僕も基礎づくりの段階なのだが、彼は、僕に、「できないという思い込みをなくすんですよ。そうすれば、できるようになります。ウォーキングが一番いいんです。まずはスポーツクラブでウォーキングを始めてください」と言ってくれた。

僕は、これまでスポーツクラブに行っても、ただ遊びに行っているようなもの。プールに入るのは気持ちがいいし、たまに音楽に合わせてスタジオのプログラムで身体を動かすのは楽しい。ウォーキングマシンなどは使ったこともなかった。しかし、彼に言われて、僕はウォーキングマシンに初挑戦し始めた。遅すぎる。もうクラブに入って6年もたっているというのに……。しかし、彼の言うとおりだった。1度にマシンを使える制限時間は30分なので、大して歩くわけではない。しかし、黙々と30分歩き続けると、終わったあとが爽快だ。身体が軽くなったような気持ちになる。

「俺はこれまで歩いてこなかったわけじゃないよ。重い荷物を抱えて、仕事場に向かうのもそれなりにしんどいからね」と僕が言うと、「仕事の移動で歩くのと、運動で歩くのとでは違うんですよ」と彼は言っていたが、本当にそうだった。歩くことに集中する。一定のリズムで歩く。これは思っていた以上の運動で、やってみると楽しいものでもあった。考えてみると俺は、せっかちなので、仕事場に早め早めに出かける。遅刻したことは一度もない。他の人たちよりも早くに仕事場に着いている。しかし、これは良いとばかりも言えないのかもしれない。僕は時間のゆとりをたっぷり持って行動するため、約束の時間に遅れることはないが、急ぐということがない。歩くのもダラダラした歩き方だ。電車の時間も調べたりはしない。これからは、「何時の電車にのるんだ」と時間の目標を持って行動することにしようと思われさせた。

映画では、スンシンがおっさんに「感情なんだよ。恐怖の先にあるものを見たくないのかよ」と諭す場面が出てくる。彼も僕にこれと似たようなことを言ってくれた。「国友さんは、結果をおそれて、外に出ようとしませんですよ。地震が来るのを恐れて、部屋から出れないのと一緒なんです」。うーん、耳が痛い！ 確かにそうなんだよなあ。僕は、いったん思いこんでしまうと、なかなかそこから抜け出すことができない。

僕が不登校になったのは、スポーツができない、男らしくないという問題が大きかったのだが、今の僕は、プールだったら体力の続く限り泳げるし、彼に言わせれば、「国友さん、自分では男らしくないと思っているみたいだけど、他の人から見たら、十分、男らしい人

に見えますよ」とのこと。同じことは、何人もの人から言われた。俺は、子供の頃、「おかま」とか「女の腐ったような子」だと言われ続けたため、それから40年近い月日がたっているのに、いまだに、自分が女っぽい男だと思い込んでいる。しかし、そういえば、大学に入って、京都に出てきてからは、女っぽいなんて言われたことは一度もないのだ。だけど、僕は、自分が女っぽいと思ひ込み、そして、それを意識し過ぎて、男っぽいことをするのは柄に合わないから恥ずかしいと極力男っぽいことを避けてきた。俺だって男だから、心の奥底には男性性が眠っていたのに、それを必死で抑圧してきたのだ。

だから今となって、少しその呪縛がとけて、彼と半裸のまま歩きまわったり、ファイトクラブごっこしたりするのが、なんとも言えず楽しい。自分の中の男性性を解放する。これもある意味で男性解放である。

5. ピンタ

僕は、彼に何度かピンタもくらわしてもらっている。僕は尊敬する男の人からだったら殴られてもいいし、殴られたいというマゾヒスティックな欲望があった。子供の頃、殴り合いとか、男っぽい喧嘩をしたことがないから、そういうものに憧れたのだろう。しかも、僕は本質的にMなので、相手を殴りたいとは思わない。殴られたいのだ。

しかし、この欲望も、なかなかかなわなかったし、これからもかなわないだろうと思っていた。いくらなんでも大人になって、相手を殴るなんてことをしたら、犯罪と見做される。だけど、彼には素直に僕の欲求を話した。

「男のドラマなんかだと、『俺を殴ってくれ』という場面が出てくるだろう？俺はああいうのに憧れるんだよね。韓国映画の『クライング・フィスト』って、大好きな映画なんだけど、この映画では主演の中年男が殴られ屋という設定になっているんだ。今度ピンタしてくれるか。」

彼もこのお願いにはさすがに戸惑っていたが、しばらくたって、僕の性格がわかってくると、殴っても大丈夫だと思っただけで、結構痛いピンタを何発か浴びせてくれた。一度、左の頬にピンタされた時はマジで痛くて、「左だけ痛いって何となく気分悪いよ」というと、今度は右の頬をピシャリとピンタしてくれた(笑)。「俺たち、変な関係だよね。」だけど、変なことでも許しあうのが友情というもの。

彼と僕の間には固い友情が芽生えていって、彼は他の人に打ち明けられないことも、僕には打ち明けてくれるようになっていった。

『フライ、ダディ、フライ』でも、スンシンがおっさんに「殴ってみよう」という場面があるのだが、殴るっていう行為は、一つのホモエロスだ。男同士の友情の証なのである。

彼と僕は、今は頻繁に会う仲だが、別れるときは必ず、男同士の固い握手を交わす。「国友さんの握手は強くて痛いくらいですよ」と彼からは言われる。僕も彼のマッサージやトレーニングの時に痛いと感じるときはたびたびだ。しかし、その痛みがなんとも気持ちいい。

映画のDVDのパッケージでは、スンシンがおっさんを殴っているところが使われているし、映画の中で、「頭殴られ過ぎて、いい感じになっているんじゃないんですか？」と訊か

れて、「かもね。」とおっさんが答える場面がある。もちろん、おっさんは、殴られるのが不快だとは感じていない。

こう考えてみると、「男は痛い！」っていうのも、悪くないことに思えてくる。男は痛いけど、それを分かち合える男の友がいれば、痛みがホモエロスとなるのだ。

6．ギブ&テイクの友情

彼と僕には、16年の年の差がある。父子というには年が近過ぎるし、兄弟というには離れ過ぎている。友達というにも離れ過ぎているのかもしれない。したがって、一番親密になれない年の差のようにも思うんだけど、僕は彼から多くのことを学んでいった。つきあっていて楽しいし、まったく疲れない。

マッサージの後、トレーニングも教えてもらうのだが、時々、厳しいことを言われたりもする。僕は厳しくされると反発する性格なのだが、しかし、16歳年齢が下なので、それほど腹が立たない。スポーツの面では彼のほうが上だから、上から目線になるけれど、年や僕のほうが上だから、上手い具合に緩和されるのである。彼から若さをテイク、代わりに僕は人生経験と知識をギブするのだ。そうそう、時々、彼に飯をおごってあげたりもする。彼は、さすがに男っぽくて、王将とかが好きなので、おごってもそれほどお金はかからない(笑)。

『フライ、ダディ、フライ』では、夕焼けをバックに、木の大きな枝の上に座った、スンシンとおっさんが身の上話をする場面が、メルヘンのようにきれいで、一つのハイライトだ。2人はお互いの頭を抱きしめ会ったり、

腰を抱いたりする。男同士の心が通い合うスキンシップの瞬間だ。

「早く強くなって、俺を守ってくれよ」というスンシン。一見、スンシンのほうが腕っ節が強くて、おっさんを守っているように見えるのだが、彼もどこかでおっさんに頼っているのだ。友情っていうのはこうでなきゃいけないよね。

「自分を信じることができなくなった時、恐怖が入ってくる。どんなことがあっても自分を信じるんだ」とスンシン。「君を信じるよ」とおっさん。なんとなく、涙が出てくる。僕は、若い頃に男同士の友情を経験できなかったため、こういう友情ものに弱いのだ。。。

7．心の傷を抱えて……。

彼と僕には共通点があることも、つきあっているうちに分かっていった。彼は大学を出た後、肉体系フリーターで、定職についたことはないらしい。「周りからは大学まで出ているのに、なぜ、そんな仕事ばかりするの?」と言われるけど、「身体を動かすのが好きなんです」と言っていた。どおりで、彼は身体のことには知り尽くしていて、マッサージの腕は生半可じゃない。

僕も、48にもなって定職についたことのない非常勤講師だ。周りからは、「あなたみたいに能力のある人が、非常勤のままなんてもったいない」と皮肉をこめた、意地の悪い言い方で言われることがあって、カチンとくることがたびたびだ。俺だって、何も考えずに非常勤を貫いてきたわけじゃないよ。俺はトラウマを背負っているから、どうしても自分の殻をやぶることができなくて、もがき苦しん

だ。そして、もう運命にまかせよう、よい仕事がめぐってきたら、そして、そういう気分になったら、専任になってもいいし、そういう巡り合いがなかったら、一生非常勤でもいいと開き直るようになったんだよ。長い葛藤の末に……。

フェミニストは、「結婚すると女は檻に入れられる」と言うだろう。そうであるのならば、「就職すると男は檻に入れられる」と言うことなんじゃないわけ……。棚からぼた餅を待っているなんて、考え方が甘いと言われるかもしれないが、僕は自分にふさわしい檻がやってくるまでは、放浪の旅を続けようと思う。幸い、一緒に旅してくれる相棒も見つかった。

男は痛い！けど、でも、痛がることを楽しみながら生きていきたい。その支えとなってくれる人が、一人現れた。男は痛い！のならば、その傷を癒してくれるのは、女ではなく、男なのだ。

でも、そういう友はなかなか見つからない男が大半なんじゃないかな？ やはり、男は痛い！！！！よね。